

## 「イエスの宣教」

2021年8月1日（日）仙台教会主日礼拝説教 マルコ1：35～39

牧師 宇都宮 翼

おはようございます。先週は、気象庁の統計開始以来初めて、宮城県に台風が上陸することになりました。先々週は、東北学院高等学校が初めて甲子園への出場を決めたという嬉しい知らせがありましたが、今週は、あまり嬉しい初めてをお話しすることになりました。これから世界は、私たちが経験したことがない初めてのことが、多く待っているかもしれません。その初めてを乗り越えていくためには、私たちが互いに協力して生きるということが、大切だろうと思います。この時代の危機感を共有し、共に歩んでいきたいと思います。

さて先週は、イエスが人のために歩んだというお話をしました。神のためにとか、教会のためにとかではなく、目の前に現れる人たちに、命の解放や癒しの業を行うことそのものが、神の出来事であることをイエスは感じており、そのイエスの歩みそのものが、出会う人たちにとっての良き知らせ、福音だったというお話をさせていただきました。虐げられ、人間扱いされない命があってはならない。神はすべての人間を大切に思われていることを言動で示すことが、イエスの成していたことだったと言えます。

今朝は、そんなイエスが、宣教をどのように考えていたのかを聖書から見ながら、わたしたちの歩み方を考えてみたいと思います。

聖書に語られているイエスの日常の歩みとは、どんなものでしょうか。それは、病人の癒しと悪霊からの解放と言ってもよいだろうと思います。病人の癒しと聞くとき、私たちは奇跡的な力を想像してしまいますが、そうであるとは限りません。例えば、先週の聖書の箇所ではペトロの姑が熱を出していましたが、イエスが彼女にしたことは、手を取って、起こされたということです。今で言うなら、手当と言って良いように思います。病気の方に共感し、病から癒されることを願うことです。当時、熱などを出し病気になる場合、悪霊と同じように、その人に熱が入り病気となり、熱がその人から出ていくと癒されると考えられていました。その扱いは、全く悪霊と同じです。医学が発達していない2000年前の人たちにとって、得体の知れないものは、すべて悪霊のような、外からやってくるものだったのです。悪霊と病の両者に共通していたことは、その人が汚れているということでした。触れればうつるということです。ですから、イエスのように、病人に寄り添い、手で触れるような人は、少なかつただろうと思います。イエスにとって、病人も悪霊に取り憑かれた者も同じ人間であり、神の祝福が与えられる存在だったと言えます。イエスの歩みは、人に寄り添い、共感し、その人らしさを失わせているものからの解放に伴うというものでした。そんな歩み

を日々行っていたとしたら、イエスの疲れというものは、予想以上のものだったと思いま  
す。皆さんも誰かのお話をじっくり聞くということをすることがあると思います。それは非  
常に疲れる作業です。心も体も疲労します。共感とは、同じように感じるということですか  
ら、目の前にいる人の苦しみや悲しみは、聞く者の苦しみや悲しみになります。共感すれば  
するほど、私たちは疲れを覚えます。しかしそんな共感する力は、人間に与えられていると  
ても大切なものです。

疲れを覚えたとき、イエスがどんなことをしたのでしょうか。それが今朝の聖書箇所の最  
初の部分です。彼は、「朝早くまだ暗いうちに起きて、人里離れたところへ出て行き、そこ  
で祈られた」のです。イエスがどうして、あえて早朝暗いうちに人里離れたところへ行った  
のか、その理由は皆さんも想像ができると思います。簡単に言うなら、一人になるためで  
す。なぜ一人になる必要があったのでしょうか。それは、イエス自身が癒され、自らを保つと  
きが必要だったからだと思います。

私はこのイエスが一人になる場面を見るときに、ドイツの牧師であり、神学者であったデ  
ィートリッヒ・ボンヘッファーが、『共に生きる生活』の中で語っていたことを思い出しま  
す。「ひとりでいることのできない者は、交わりにはいることを用心しなさい。そのような  
人は、自分自身と交わりとを、ただ傷つけるだけである。神があなたを呼ばれた時、あなた  
はただひとりで神の前に立った。ひとりであなたはその召しに従わねばならなかつた。ひと  
りであなたは自分の十字架を負い、戦い、祈らねばならなかつた。・・・しかしその逆の命  
題もまた真である。交わりの中にいない者は、ひとりでいることを用心しなさい。あなたは  
教会の中へと召されたのである。・・・あなたが兄弟の交わりを軽蔑するなら、あなたはイ  
エス・キリストの召しを拒むのであり、そうすれば、あなたがひとりでいることは、あなた  
にとってただわざわいとなるだけであろう。」

ボンヘッファーの言い回しはとても難しいのですが、どこか依存的な生き方の問題性を言  
っているようにも思います。私たちは、一人だけでは生きられません。なぜなら、ひとりで  
は、自分を知ることができないからです。交わりは鏡と似ています。交わりにおいて、私た  
ちは自らを知ります。しかしそれは、知るだけであり、そこに自分の価値を見いだすわけ  
はありません。本来の自分は、すでに神によってこの世に生まれた時から、神による認知に  
よって、完成しています。私たちが生きて良い確信は、神が私を創造してくれたということ  
です。神から自らが認知されている確信をもって、交わりに生きることが大切なのです。そ  
して交わりの中において、私という個性は用いられ、他者の持っている個性も大切にできる  
のです。ひとりであることか、交わりの中にいることなのか、どちらかだけになるとき、私  
たちは大切なことを見失うことになるのです。

教会でよくあることは、社会で認められないという思いを教会で実現しようとしています。多くは奉仕によってなされます。けれども、その奉仕は何のためになされるのでしょうか。自分を認めてもらうために行うとき、必ず不平不満が出てくるのです。

イエスは、交わりの大切さを知っていたからこそ、一人であることも大切にされたのです。疲れを癒すだけではなく、自らの存在を交わりの中にのみ依存させないために、一人になる時間を持ったのです。

しかしそんなイエスとは異なり、弟子たちは違ったようです。シモンとその仲間は、イエスの後を追ってきたことが語られています。イエスへの依存というものが見えてきます。イエスがいなくなつたことが気になってということはあったでしょうが、それ以上に、イエスのことより、自分のことを考えていたように思います。イエスが心配ではなく、イエスがいなくなってしまった自分が心配だったのです。その弟子たちがイエスを見つけたときに語った言葉は、「みんなが捜しています」です。弟子たちに、自分というものが見えていません。今でもよく聞く、「みんなが」という無責任な言葉です。弟子たちの自立の問題性が、浮き彫りになっています。

そんな自立していない、依存的な弟子たちに対して、イエスが語った言葉は、「近くの他の町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである」。明確なイエスの意志が語られています。「わたしは宣教する」。「そのためにわたしは出て来たのである」。

他の人たちが待っているからとか、みんなが望んでいるからではないのです。イエスが宣教をすると語るのです。自らの成すべき業として、イエスが神から示されていたことだったのです。それは、誰かに責任を負わせて、片手間に行うことではなかったのです。

この明確なイエスの意志は、どこから来ていたのでしょうか。それは、彼がガリラヤから、宣教の業を始めたことからはつきりしています。汚れた土地、神の祝福を得られない場所、異邦人が多く住んでいる罪人たちの世界。それがガリラヤでした。ユダヤ人の価値観から見れば、ガリラヤは救いの無い場所だったのです。

そんなガリラヤでイエスは育ったのです。人々から蔑まれ、貧しく、苦しみと悲しみの中で生きている人たちが沢山いたのです。その人たちの命を解放し、同じ神の祝福を得ることができる命であることを、イエスは自らの意志で示したかったのだろうと思います。そんな思いが、次の聖書箇所にはつきり語られています。「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」

何度も言っていますが、悪霊とは当時のユダヤの価値観であり、人を分類するものです。悪霊に取り憑かれた者は、すべて罪人であり、異邦人と同じような者だということです。そ

の命の分断をイエスは許せなかつたでしょう。だからこそ、彼は命の尊さを説き、悪霊を追い出したのです。

イエスはこの宣教の業を、新しい教えを、自らの意志において行ったのです。神の召しというものもあったでしょう。しかしそれ以上に、ガリラヤの現状に対しての怒りと悲しみから、彼は宣教したのです。

現代に生きる私たち、特にイエスに出会い、イエスを人々に伝えようとしている私たちには、どんな思いを持っているでしょうか。イエスが私たちに宣教するように命令しているから、伝道しなければならないと考えているでしょうか。

今日の聖書箇所から教えられることは、私たちは今自ら生きている現実を見て、そこでどう生きるのか自分で考えなければならないということです。この世界は、2000年前の世界と比べて、平和になり、命の格差がなくなっているでしょうか。あのガリラヤは、この世界からなくなつたでしょうか。全くそんなことは言えません。相変わらず、私たちの目の前には、あのガリラヤが広がっています。命が勝ち組、負け組に分類され、多様性を大切にと言いながら、依然として、自らと異なる者に差別的な言動を繰り返しています。そんな世界を前に、私たちは一人ひとり神の前に立ち、一人で祈るのであります。自らの命を大事に思われている神に認知されながら、私たちはこれからどう歩むのでしょうか。やはり、イエスと同じように、私は宣教すると語りたいと思うのです。神に造られたすべての命が解放され、その価値が回復されるように、私たちも悪霊を追い出す必要があるのです。それは、自らの意志において成されていくことです。聖書に書かれているから、偉い誰かに言われたからではなく、また宣教すれば、自らが幸せになれるからでもなく、私たちはイエスと同じ、この社会で苦しみ、悲しんでいる人たちに共感するが故に、宣教するのです。

宣教とは、決して難しいことを語ることではありません。すべての命を大切に思うことから来る言葉であり、行動です。教会は、これからどう歩むのか問われています。そんな中、私たちははっきりと宣教する。そして私は宣教すると語りたいと思います。

最後に聖書を一ヵ所お読みして、メッセージを終わります。

箴言 12：11 「自分の土地を耕す人はパンに飽き足りる。意志の弱い者は空を追う。」